

研究主題と副題

「主体的に学び、考えを深める生徒の育成」
～ ICT活用による自力解決・協働解決の充実を通して～

1 研究の構想

(1) 主題の意味

「主体的に学び」とは、生徒が学習課題を設定して、学習の目標（ゴール像）を明確にした上で、解決への見通しをもち、粘り強く取り組み、自分の考えを形成するとともに、振り返って次につなげることである。

「考えを深める」とは、他者との考えの交流等を通して、比較・分類・関連付けして自分の考えを広げたり、深めたりしながら、自分の考えを再構築したり、新たな考えを創造したりすることである。

(2) 副題の意味

ア ICT活用による自力解決・協働解決とは

「自力解決」とは、課題に対して、解決の見通しをもち、粘り強く取り組み、自分の考えをつくることである。

「協働解決」とは、目的意識をもち、ペアやグループでそれぞれの考えを出し合い、自分の考えを付加修正したり、解決策を考えたりすることである。

「ICT活用による自力解決・協働解決の充実」とは、生徒がICTを用いて、情報の収集、情報の整理・分析をしながら、課題に対する自分の考えを形成するとともに、音声言語だけでなくICT活用による視覚情報等による表現活動や交流活動を通して、自分の考えを付加修正したり、解決策を考えたりすることである。

【資料1】は、1単位時間における自力解決・協働解決の位置づけである。

過程	子どもの活動	子どもの姿
であ う	問題、知識との出会い	「なんで？」 (疑問)  「やってみよう」 (興味)
	めあてをたてる	「できるようにしたい！」 (憧れ)
つく る	見通しをもつ	「こう考えるのかな？」 (予想) 
	自力解決 ・ 協働解決	「必ず解決する！」 (意欲)  「できた！」 (達成感) 
ふか める		「なるほど」 (納得)  「すごい」 (驚き) 
	まとめ	「わかった」「わからない」 (自覚) 
ふり かえ る	振り返り	「やればできる」 (自己効力感)  「もっとしたい」 (向上心) 

【資料1】 1単位時間の自力解決・協働解決の位置づけ

(3) 研究の目的

- 各教科における自力解決・協働解決の充実に向けたICTの効果的な活用法を究明する。
- 授業改善を日常化するための組織編成や学力の基盤づくりのための取組等の有効性を探る。

(4) 研究の仮説

ICTを活用した自力解決と協働解決の充実による授業改善や家庭学習等の学力の基盤づくりを日常的、組織的に行えば、学力向上プランの具現化につながるので、「主体的に学び、考えを深める生徒」が育つであろう。

2 研究の内容

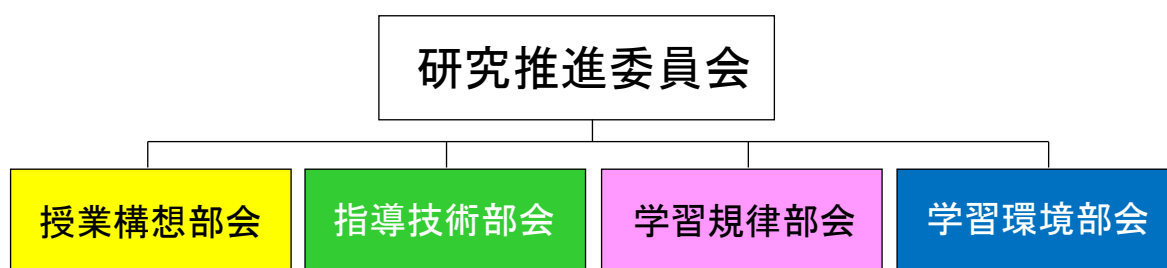
(1) 「組織づくり」の内容

ア 全体組織

研究を行っていく上での全体組織を【資料2】のように編成した。

研究推進委員会は、校長、教頭、教務主幹教諭、指導教諭（学力Co）、研究主任、ICT推進教諭等の8名で構成される。主に、研究全体の企画・運営、調整、また、非認知的能力や補充学習等の学力の基盤づくり、家庭学習等の充実を図るための方策について考える。

授業改善4部会（以下4部会）は、部会のリーダーを研究推進委員会のメンバーが担い、職員全員の参画意識の向上、授業改善の当事者意識を高めるために、全員がいずれかの部会に所属する。主に、教師一人一人の授業改善を目指し、授業構想部会、指導技術部会、学習規律部会、学習環境部会の4つからなる。



【資料2】全体組織図

イ 研究推進委員会の取組内容

- 研究の方向性の確立、研究構想の立案、研究の評価・改善
- 校内研修計画の企画・運営
- 4部会の運営と進捗状況の共有と調整
- 学力の基盤づくりの取組の推進
- 家庭学習等の取組の推進

ウ 授業改善 4 部会の取組内容

各部会の取組内容は【資料 3】の通りである。



【資料 3】 4 部会の主な取組内容

(2)「授業づくり」の内容

ア 問題解決的な学習の過程（三輪スタンダード）

H30・R1・R2 の県重点課題の取組の成果物として、本校には、【資料 4】のような「三輪スタンダード」という問題解決な学習モデルがある。本研究については、この三輪スタンダードを基に、授業改善を行っていく。

	問題にであう	考えをつくる	考えをふかめる	学習をふりかえる
内容	・学級や個人で単元のゴールを明らかにする。 ・解決方法や答えの見通しを持つ。	・構成図やノートを作成しながら、つながりや理由を説明する。	・自他の考えを交流し、共通点や相違点を確認したり、協議したりする。	・キーワードをもとに表現物の作成や評価を行う。 ・今後に向けての成果の振り返りを行う。
方法	・既習と比較し、相違点や共通点から学習課題を設定する。 ・既習から、単元の問題を解決するために「大事なキー」を見出す。	・各教科の見方・考え方をつかう。 ・図や言葉、式等をつなぐノートを作成する。	・目的に合わせて、効果的に交流を行う。 ・自他の考えをつなぎ、根拠や理由を明確にする。	・学習課題を解決するために習得、使用した知識・技能等を確認する。

【資料 4】 三輪スタンダード 学習過程モデル

イ ICT活用による自力解決と協働解決

自力解決と協働解決パターンを次のとおり設定し、ICTを活用した効果的な学習活動を行っていく。

○自力解決のパターン

A 論理的に考える活動	根拠を明らかにし、主張・理由付けを意識して、論理的に考える。
B 関係をとらえて考える活動	情報と情報（他者の考え）を、比較・分類・関連付けし、関係性をとらえて考える。
C 創造したり実践したりする活動	モデルやポイントを参考に、制作したり、練習したりする。

【資料5】『久留米市教育委員会教育センターだより』を参考

○協働解決のパターン

A 考えを広げる活動	グループや学級全体で意見を出し合ったり、説明し合ったりする。
B 整理し、まとめる活動	複数の意見や考えを議論して、協働的に、整理し、まとめたり、新たなものを創造したりする。
C 協働で制作する活動	グループでの分担や協議をすることにより、一つの作品を制作する。

【資料6】文科省『教科等の指導におけるICTの活用』を参考

○ICT活用例

- ・教員による教材の提示
- ・一人一人の習熟の程度に応じた学習
- ・インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録
- ・シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習
- ・マルチメディアを用いた資料、作品の制作
- ・グループ学習や学級全体での発表や話し合い
- ・複数の意見・考えを議論して整理
- ・グループでの分類、協働による作品制作

(3) 学力の基盤づくり等の内容

- 補充学習（朝の学習時間の運用の仕方）
- テストサイクルの実施
- 家庭学習の充実
- 異年齢集団による活動
- 学級集団づくり
- 自己肯定感を育む諸活動
- 町の取組との連携

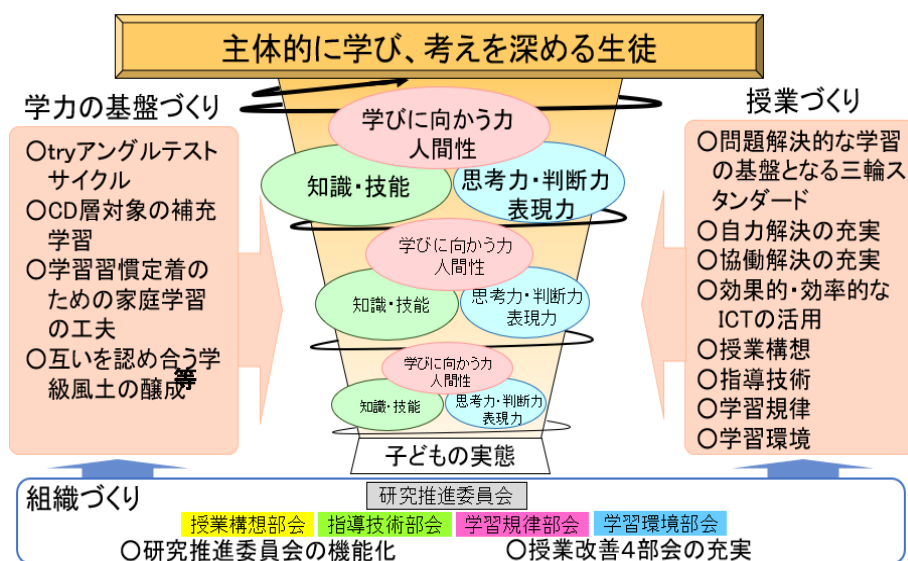
(4) 近隣校との研究推進の内容

- 筑前町学力向上プロジェクトチーム
- 学校間交流研修
- 三輪小学校との連携
- 夜須中学校との学力向上に関する生徒会交流

(5) ICTを活用した広報手段の活用

○三輪中学校公式ウェブサイトの定期的な更新

(6) 研究構想図



【資料 7】 研究構想図

5 研究の実際【令和5年度】

(1) 「組織づくり」の実際【令和5年度】

ア 研究推進委員会及び4部会の週時程の位置付け

研究推進委員会は、週時程の中に位置づけ、4部会は、全員参加のため、5コマで編成した月曜日の放課後を利用して開催している。合同部会やミニ研修は、月に1～2回程度実施している。研究推進委員は、4部会の部長を務め、各部会の取組内容等を調整し、横の連携も密にしながら行っている。臨時部会や生徒会との話し合いも行い、それぞれの部会が切磋琢磨しながら授業改善に取り組んでいる【資料8】。

	月	火	水	木	金
1					
2					
3			運営委		
4					
5				研推	
6	4部会				

【資料 8】 週時程への位置づけ

イ 組織の運用

① 研究推進委員会の取組

週1回の研究推進委員会では、1学期より研究の方向性を模索し、研究構想の立案等を行ってきた。これまでの研究の評価・改善を図るために、夏休みに校内研修会を開き、主題である「主体的に学び、考えを深める生徒」について、再度、個々の考えを共有し、自力解決と協働解決に授業づくりの重点を置くという共通理解を図った。また、4部会の連絡調整をしたり、それぞれの提案内容を協議したり、各部会での悩みを出し合い、解決策を考えたりした（右の研修推進委員会の取組を参照）。

月	研究推進委員会の取組
5月	研究構想の試案、定期テストサイクル検討
6月	研究構想の立案、校内研修の企画
7月	生徒授業評価分析、主題の設定
8月	学力調査分析、ミニ研修会、補充学習の評価・改善
9月	ミニ研修会、家庭学習評価・改善
10月	ミニ研修会、ICT推進研修会
11月	研究発表会準備、リハーサル準備

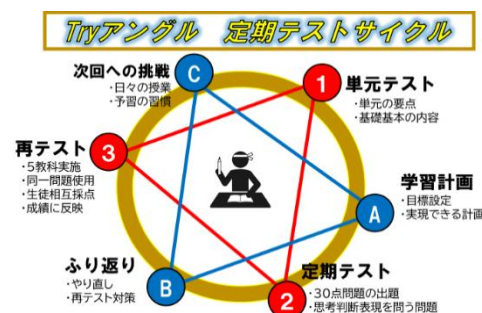
その他、研究推進委員会では、4部会と並行して、授業以外の学力の基盤づくり等の取組についても以下のように進めてきた。

○C, D層の補充学習【学力向上プラン視点3】

朝の会と1時間目の間に15分間の朝活動がある。その時間を活用し、C, D層の生徒を対象にした基礎・基本定着のための補充学習を実施している。定期テストで、C, D層の生徒をピックアップし、見直ししながら進めている。内容に関しては、数学を中心に、学年で重点的に指導する内容を決めて実施した。指導は数学科の担当を中心に、学年職員で指導にあたっている。

○try アングル定期テストサイクル【学力向上プラン視点3】

生徒の学び直しの機会の確保、自己の学びの実感を目的に、授業での小テスト、単元テスト、定期テスト、定期再テストといったテストサイクルを確立した。形成的評価、総括的評価の充実につながり、定期再テストを行うことで、生徒の学ぶ意欲を喚起し、テスト後もチャレンジする生徒が増えている【資料9】。



【資料9】定期テストサイクル

② 4部会の取組

本年度、授業改善に特化した4つの部会（授業構想部会、指導技術部会、学習規律部会、学習環境部会）を編成した【資料3】。研究を進めていく上で、各部同士が連携できるように、各部長を研究推進委員会メンバーで構成した。部会の所属に関しては、全職員に希望をとり、教科や年齢を考慮して決定した。

部会決定後、各部会で目標を設定し、それぞれの視点から、成果や課題を整理しながら、取組内容を考えたり、試行的に実践したりして、【資料10】のように、提案した。各部会で協議し、職員全体で共通理解を図りたいことは、ミニ研修会で提案したり、提案した内容を深めるために、全体で研修会を行ったりしている。

また、全体で授業改善をしていくという機運を高めることと、各部会内でOJTとしての機能を発揮することをねらいとして、部会内で研究授業を行った。授業者が研究授業1週間前までに指導案を渡し、それをもとに5日前までに指導案審議を行う。修正した指導案を前日までに全職員に配布し、研究授業後、部会メンバーとその他参観した教職員で授業整理会を行い、成果と課題を明らかにしていった。

学習規律 部会	
1 目標	効率的な授業展開を支える学習規律を 生徒会と連携 してつくり上げる。
2 部会で取組内容	○生徒会委員会と連携した基本的な学習のルール ○学習マナー ○学習形態
3 これまでの課題等	○授業準備や学習ルールについての課題 ・次時の授業に必要なものが十分に準備できていない。 ・落ち着いた授業を始めることができていない。 ○班活動の課題 ・現行の6〜7人班では、生徒同士の話が聞こえていない。 ・全員が意見を言うのに時間がかかる。 ・班の意見をまとめるのが難しい。
4 共通実践事項	○生活班を4〜5人にする。 ○学習委員会が作成した「整理整頓モデルポスター」を掲示し、呼びかける。 ○背面黒板の枠組みを学習の見通しが持てるように変更する。
5 今後の方向性	○「三輪中の学び」(挨拶、礼など)の見直し ○教員の指示、説明、発問の仕方等の提案 ○生徒委員会と協議し、主体的な学びにつながる実践

【資料10】部会提案シート

さらに、記録に関しては、来年度、メンバー変更になっても持続可能な研究になるように、学校共有フォルダに蓄積していった。下の表は、令和5年度の各部会の取組の内容である。【資料11】

部会	授業構想部会	指導技術部会	学習規律部会	学習環境部会
7月	・部会内容整理 ・相互授業参観	・部会内容整理	・部会内容整理	・部会内容整理
8月	・共通実践項目検討	・共通実践項目検討	・共通実践項目検討 ・生徒アンケート	・共通実践項目検討 ・夏のタブレット勉強会 ・タブレットアンケート
9月	・指導案審議 ・共通実践項目試行	・指導案審議、研究授業 ・共通実践項目試行	・指導案審議 ・生徒会との合同会議	・指導案審議 ・共通実践項目試行
	部会提案シート作成			
10月	・研究授業 ・相互授業参観	・共通カード作成 ・教師アンケート	・生徒会との合同会議 ・研究授業	・ICT推進研修 ・デジタルノート説明
	4部会合同研修会			
11月	・研究授業	・研究授業	・研究授業	・研究授業
	部会プレ発表会、発表会全体リハーサル			

【資料 11】 4部会の取組内容

(2)「授業づくり」の実際【令和5年度】

ア 授業構想部会の実践と提案

授業構想部会は、学習過程やそれぞれの活動のあり方そのものを提案していく部会である。生徒による授業評価アンケートや全国学力・学習状況調査の質問項目では、ペアやグループ活動に関する項目は、高い平均値を出しており、普段の授業において、協働的な学びに取り組んでいることがわかる。そこで、さらに子どもの学びがよりよい問題解決過程となるように、自力解決と協働解決の質の向上を図る提案を練った。



【資料 12】 相互授業参観の様子

また、2学期に2週間の相互授業参観の実施を提案した。相互授業参観とは、それぞれがお互いに授業を参観しあい、教科間や年齢の壁を越え、自由に授業を参観できる雰囲気醸成したり、手だての有効性を客観的に見て、自身の授業改善に生かしたりすることを目的とするものである【資料 12】。参観者はシートに書き込み、授業者がフィードバックできるように職員室後方に掲示した。

授業構想部会提案による共通実践項目

- ◆学習過程の中の自力解決パターン、協働解決パターンの実践
- ◆相互授業参観の取組

イ 指導技術部会の実践と提案

指導技術部会は、教師の指導技術を高めるために、板書、発問等について提案していく部会である。1学期の連絡協議会における授業チェックリスト（4件法）で、「学習過程を踏まえた構造化された板書及びノート指導」の項目の平均値が2.0であったことから、ユニバーサルデザインの視点で、板書の統一化を図るようにした。板書にお

いては、めあて、まとめ、自力解決、協働解決を必須項目とし、構造的な板書になるようにした。めあてとまとめについて、めあてでまとめるという意味から同色の赤色の枠で囲むようにした。

また、令和5年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙によると、「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」の質問においては、当てはまると答えた生徒は、全国平均を下回っていた。この結果から、協働解決の場面において、目的が明確でないことと協働で解決する方法が分からないことや批判的思考の力を高められていないことが伺える。そこで、協働解決場面では、小集団で活動することを基本とした。さらに、自他の考えを出し合い、物事や情報を多様な角度から検討するために考えを比べ、論理的・客観的に理解するために、「出し合う→比べる→高め合う」ことを意識して行うように共通理解を図った【資料13】。



【資料13】協働解決の様子

指導技術部会提案による共通実践項目

- ◆思考の流れに沿った板書（めあて、まとめのユニバーサルデザイン）
- ◆協働解決（小集団）「出し合う→比べる→高め合う」の目的の明確化

ウ 学習規律部会の実践と提案

学習規律部会は、学習委員会とタイアップして取組内容を考えていく部会である。生徒の声も生かすために、生徒会三役や学習委員と協議の場をもち、効率的な授業展開を支える学習規律等を考えていった【資料14】。まず、グループでの協働解決の場面では、課題として、話し合いに参加していない生徒がいたり、グループの中で発言する時間がなかったりするということが挙げられ、6人編成の班を4人編成にするようにした。さらに、学習用具の整理整頓に取り組むべきとの生徒の声を生かし、ポスターを作成したり、置くべきものを精選したりして、机の中やロッカーの中の整理に取り組んだ。



【資料14】生徒会との協議の様子

学習規律部会提案による共通実践項目

- ◆小集団は、全学級4人を基本とする
- ◆学習委員会作成の「整理整頓モデルポスター」を活用した整理整頓の徹底
- ◆学習の見通しをもつことができるような背面黒板の使用方法的徹底

エ 学習環境部会の実践と提案

学習環境部会は、ICT環境や教室環境等を整えることに特化した部会である。令和5年度の全国学力・学習状況調査の質問紙のICT機器を使う有用性を感じていない生徒が多いということから、授業の中で、動画や板書の撮影、ネットのURLなどの情報をデジタルノートに蓄積していき、その情報で振り返ることができるように

したいと考え、様々なソフトやアプリケーションを試した。その中で、共通実践として、デジタルノートを活用するようにした。学習環境部会の教師は、このデジタルノートを全校生徒が使えるようにするために、各学級を回り、使用方法等の説明会を実施したり、教師向けにミニ研修会を開設したりして、普及に取り組んだ。

以下は、各教科のICT活用例である。

○自力解決・協働解決の場面

- ・数学では、個別最適な学び（指導の個別化）として、学習問題の解説動画を生徒が自己調整しながら、個々で見る場面で活用した。

【資料 15①】

- ・理科では、教師から送信されたデジタルノートを用い、試行錯誤しながら作図についての問題解決場面で活用した。【資料 15②】

- ・外国語科では、日本文化について調べたことを、デジタルノート上で英文に表現し発表する場面で活用した。【資料 15③】

- ・保健体育では、タブレットに送信されたモデル動画をグループで確認しながら、技の練習を行う場面で活用した。【資料 15④】



①



②



③



④

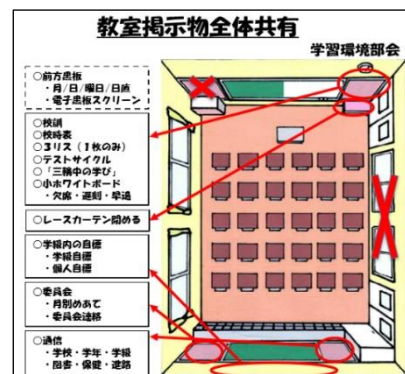
【資料 15】 ICT を活用した学習活動の様子

○振り返りの場面

【資料 16】は、数学の授業での毎時間の振り返りである。毎時間、評価、記述、板書を保存し、次時の学習に活かしている。また、教室環境についても、ユニバーサルデザインの視点から、掲示場所を見直したり、学習に向かうための共通掲示物等を作成したりして、環境整備を行った【資料 17】。

	学習内容	評価	振り返り	黒板写真
10/12 木曜	関数 $y=ax^2$ の式	3	二次関数 $y = ax^2$ の式で表されることがわかった。 次の時間は、式に2乗があると、グラフとかはどのようになるのか考えたい。	
10/18 水曜	関数 $y=ax^2$ のグラフ 1	4	二次関数 $y = ax^2$ のグラフを書いた。 $y = -ax^2$ のグラフと線対称であることがわかった。どちらも原点を通る。	
10/19 木曜	関数 $y=ax^2$ のグラフ 2	4	$y = ax^2$ のグラフの特徴をつかむことができた。曲線のことを放物線ということがわかった。 $y = ax^3$ だとどのような疑問に思った。	

【資料 16】 デジタルノートを使った振り返り



【資料 17】 教室掲示物全体共有

学習環境部会提案による共通実践項目

- ◆各教科でのデジタルノートでの振り返りの蓄積
- ◆デジタルノート活用による情報管理
- ◆各教室の学習環境の整備

(3) 近隣校との研究推進

ア 筑前町の学力向上プロジェクトチーム会議

筑前町は小学校4校、中学校2校の計6校である。6校の学力向上C oが集まり、各学校の取組や取組の成果と課題を共有している。会の中で、三輪中学校は、毎回、学力向上推進拠点校指定事業の授業づくりと組織づくりについての進捗状況を説明している。

他の学校の実践を取り入れたり、現在取り組んでいることに関しての意見をもらったりして、研究の内容や方法の充実を図っている【資料18】。



【資料18】学力向上プロジェクトチーム会議の様子

イ 小中連携による学力向上の取組

小中9年間をつないだ学力向上を目指し、授業改善を継続的に進めるために、中学校区の三輪小学校の教務担当主幹教諭を招聘し、小学校の授業改善と学力向上の取組の実践発表を行った。

三輪小学校は、令和5年度の全国学力・学習状況調査の結果が、同一集団において、大きく伸びており、全体で学力向上の取組を共有した。また、11月には、本校の教務担当主幹教諭と学力向上C oが三輪小学校で、授業づくりと組織づくりについて実践発表を行った。

ウ 筑前町教育委員会主催学校間交流研修

若年層の教員の研究授業、整理会に、他校の教職員を迎え入れ、情報交換することで、相互の授業構想力、授業展開力、授業評価力の向上を図ることを目的としている。本校からも、約15名の教職員が、町内の他校の公開授業に参加した。

6 成果と課題【令和5年度】

(1) 「組織づくり」の成果と課題

【成果】

- 4部会の役割と責任を明確にしたことで、授業改善への意識が高まった。
- 各部会の活動時間を確保し、定期開催したことで協働関係が醸成された。

【課題】

- 授業改善の日常化（4部会の取組の浸透・徹底）につなげる組織編成の工夫
- 学力の基盤づくりや家庭学習の取組のための組織編成の工夫
- 人材育成の視点を取り入れた組織編成の工夫

(2) 「授業づくり」の成果と課題

【成果】

- 学習過程に自力解決と協働解決を位置付けたことで、指導の重点が明確になった。
- ICT研修を重ねることにより、教職員の意識が高まり、デジタルノート活用の頻度が向上した。
- どの教科においても、めあて、まとめ、振り返りのある授業が定着した。

【課題】

- 協働解決を促す学習課題の提示の工夫
- 振り返り活動の徹底と質の向上（内容と方法の明確化）
- 子ども主体のPDCAを可能にするICTの活用

7 研究の実際【令和6年度】

(1) 「組織づくり」の実際【令和6年度】

ア 研究推進委員会のメンバー構成

研究2年目となる令和6年度は、研究推進委員のメンバー構成に、人材育成の視点を取り入れ、意図的に 若年層の教員（4年目～6年目）を起用した。目的は、個々のキャリアステージに応じた人材育成と取組や活動が形骸化せず持続可能なものにするためである。

若手教員が各部の部長となることで、研究の当事者としての責任や自覚につながったこと、他の若年教員の意識の向上にもつながったことが成果としてあげられる。

イ 組織の運用

① 研究推進委員会の取組

初年度の取組に引き続き、本年度は2年目ということで、研究の方向性の統一化を図るため、研究推進委員会で活動テーマ「子どもと創る」「質の向上」を掲げ、全体の方向性や取組内容に生かしている。7月より、北筑後教育事務所の指導主事や筑前町の指導主事にも月1回程度参加してもらい、質の向上のための取組の妥当性、信頼性についての助言等をいただいている【資料19】。



【資料19】研究推進委員会の様子

5月には、研究の方向性を全体で共有するために、昨年度の学力向上の取組の共有と提案授業を行った。「なぜ、課題を一人一人に選ばせたのか」など、授業づくりについて活発な意見が出た。また、全体交流においても建設的な意見が出て、充実したものとなった。

その他、研究推進委員会では、昨年度同様、授業以外の取組である学力の基盤づくり等の取組についても以下のように進めている。

○15分間朝の活動を活用した学力テストサイクルの確立

本年度より、朝の活動のねらいを、学力の基盤となる汎用的な学力として、基礎的読解力（国語）と論理的思考力（数学）を育むこととした。

1学期は、数学の強化期間とし、全国学力学習状況調査や県学力調査に向けて、過去問等を取り扱い、学力テストサイクルを確立した。また、2学期は、国語の強化期間とし、読書や読解力育成プリント等を活用している。3学期は、再度、数学の強化期間として、主に、縦割り学習で、教えあい学習を実施する予定である。

○数学に特化した縦割り学習会

縦割り学習とは、3年生が、1、2年生の教室に出向き、質問等に答える学習会のことである。昨年度、3学期から始めたものであるが、子どもたちの主体性が発揮され、様々な取組の中で、子どもたちの目の色が一番変わったものとなった【資料 20】。



【資料 20】縦割り学習会の様子

教室が非常に活気あふれる場となり、教師もその熱気に圧倒されるものとなった。当時、教えられる側であった2年生が「自分も3年生になって、後輩たちに勉強を教えたい」という声もあり、本年度5月～6月の朝活動を中心に行った。

参加希望する3年生は、事前にプリントをもらい、予習した状況で1、2年生に教えるに行くことで、自信をもって取り組むことができた。また、3年生自身が、教えることで理解が深まることを実感するとともに、教えることに喜びを感じたり感謝されたりすることを通して、自己肯定感の向上にもつながったものとする。

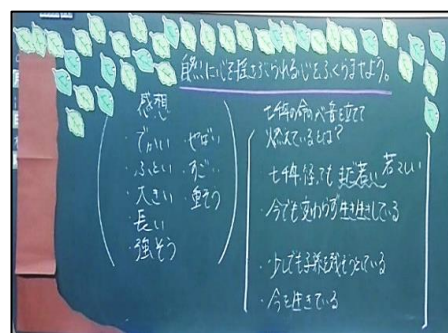
また、研究推進委員会の取組として、次のようなものが挙げられる。

○研究推進委員会による日常的な授業参観

授業力向上に向けた授業参観と日常的な授業改善を目的として行っている。取組の当初は、推進委員会のメンバーそれぞれが時間を確保し参観を行っていたが、行事や日常の業務に追われてくると、なかなか足を運べなくなった。また授業について話をする時間の確保も課題となった。そこで、週に1回、研究推進委員のメンバーでペアをつくり、空き時間を利用して授業参観を行うことにした。ペアにしたことで声を掛け合い短い時間でも授業参観をすることができるようになった。参観後は、授業者へ授業のよさを口頭で伝えることにした。時間の確保が難しい場合は、メモを机上に残して伝えたり、学力向上Co通信（三輪の風）を通じて伝えたりするようにしている。

○ミニきて参観の実施

全教員を対象に授業力向上を図ることを目的として、学力向上Coが定期的に公開授業を行った。該当する教科書や指導要領解説とともに本時のねらいや見所、留意点を明記したものを授業の前日までに、全教員に配布した。2年生道德科の授業では、板書づくりを重点にし、他教員の参考となるようにした。【資料 21】。授業後は、参観者と個別で授業についての議論をするとともに、学力向上Co通信（三輪の風）で紹介した。



【資料 21】道德科授業の板書

○校内研修（全国学力・学習状況調査の分析）の実施

全国学力・学習状況調査の結果を振り返り、今後生徒に身につけさせるべき力を具体的に把握することを目的として行った【資料 22】。

調査問題から、自分の教科で育成できそうな力を考えたり、授業改善の方法を考えたりしながら、様々な意見交流を行い、これからの授業改善につながるようにした。



【資料 22】校内研修の様子

○NEW三輪モデルの作成【資料23】

本研究で目指す生徒の主体的な姿を具現化するために、一単位時間の授業の流れとして、三輪スタンダードの見直しを行った。この三輪スタンダードは、一単位時間の授業の流れを示すもので、「であう・つくる・ふかめる・ふりかえる」のそれぞれの段階での活動や教師の手だてと目指す子どもの姿を整理したものである。次ページが現時点で作成しているもので、今後、全職員からの意見を参考に更新していく予定である。

	学習の流れ	留意点・ポイント	子どもの姿
であう	問題や教材との出会い ○問題や教材との出会いを工夫し、興味・関心を高め、「問い」や「あこがれ」、「目標」を引き出します。 ・既習事項の振り返り・具体物の提示・実演等 ・子どもが「なんで?」「～したい」と思うこと 学習課題の設定 ○引き出した問いなどを基に、子どもの気付きや発言をつないで焦点化し、学習課題を設定します。 めあて ○子どもとともに、めあてをつくります。	〈導入の4パターン〉 ・既習とのずれを示す ・変化を提示する ・不十分さに気付かせる ・モデルを示す 〈「めあて」の3要素〉 ①何を【内容】 ②どのように【方法】 ③どうするのか【言語活動】	なんで? 解決したい! やってみよう! できるようになりたい! こう考えるのかな?
つくる・ふかめる	見通し ○学習課題と生活経験や既習事項を関連づけて、「何を、どのように追究・解決するか」の計画や見通しをもちます。 自力解決・協働解決 〈自力解決〉 【論理的に考える活動】 根拠を明らかにし、主張・理由付けを意識して論理的に考える 【関係をとらえて考える活動】 情報と情報(他者の考え)を比較・分類・関連付けし、関係性をとらえて考える 【創造したり実践したりする活動】 モデルやポイントを参考に、制作したり練習したりする 〈協働解決〉 【考えを広げる活動】 グループや学級全体で意見を出し合ったり、説明し合ったりする 【整理し、まとめる活動】 複数の意見や考えを議論して、協働的に、整理し、まとめたり、新たなものを創造したりする 【協働で制作する活動】 グループでの分担や協議をすることにより、一つの作品を制作する まとめ ○「何を学んだのか(内容、方法)」を書きます。 ・子どもの言葉でまとめる ・めあてに対応したまとめ ・学習した知識・技能を活用する場の設定	〈結果の見通し〉 ・結果、結論を予想する ・作品の完成図を構想するなど 〈内容の見通し〉 ・どんな知識が使えるか。 ・どんな技能が使えるか。 ・どんな考えが使えるか。 〈方法の見通し〉 ・どんな方法が使えるか。 ・どのような順序で行うかなど 〈選択肢と自己決定〉 ・学習方法 個人、ペア、グループ ・学習道具 教科書、資料集、タブレット ・学習課題 個別、グループ別、全体 ・学習ペース ・単線型、複線型 ・自由進度学習 ・教えて考えさせる授業 〈内容〉 ・答えや結論、本時のポイントとなる事柄を具体的に示す 〈方法〉 ・課題解決の際に活用した教科の見方・考え方を示す	必ず解決する! できた! 私は、こんな風に考えたよ。 そういうやり方もあるんだね。 この考えとこの考えは似ているね。 ということは?! いいや、それでも 私は、こう考えました。その理由は……。 なるほど すごい 今日は〇〇を学習して〇〇というきまりに気付いた! 練習問題を解いたら、〇〇の使い方がよくわかった。

ふりかえる	振り返り ○学びの自覚化を促します。 ・学習内容、方法、考え方、生活や社会、次の学習へのつなぎ ・新たな課題の発見 ○学びの連続性を大切にします。 ・「課題→追究→解決→新たな課題…」という学習の過程 ・「授業→家庭学習→(朝活動)→授業…」という学習サイクル	〈3つの視点〉 ①何がわかったか。 わからなかったか。 ②どのようにして、 わかったか。 ③これから、 どう活かしていくか。	
-------	--	--	---

【資料 23】 NEW三輪モデル

② 4 部会の取組

本年度も、授業改善に特化した4つの部会(授業構想部会、指導技術部会、学習規律部会、学習環境部会)を編成している。研究推進委員が4部会の部長を務め、各部会からボトムアップ型で吸い上げた意見や提案を整理し、横の連携も密にしながら運営している。また、研究推進委員会での方向性や協議の内容が部会内でも浸透、徹底できるようにした。

本年度は、教員一人一人の考えや意見が広く全体の取組に反映されるように、取組の立案から提案までのプロセスを右のような手順で行った【資料 24】。

また、部会の役割を、授業改善以外の学力基盤づくりにまで広げることで、4部会それぞれの立場で、家庭学習等の取組について、アイデア出し合ったり、提案したりできるようにした。

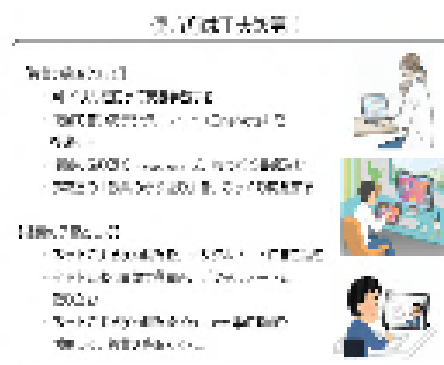
内容・方法	
現状把握 ・相互授業参観	全体
アイデアを出し合う ・KPT法を用いて考えを整理	キャリアステージ別グループ
アイデアの整理 ・SWOT分析にて整理	研究推進委員会
取組内容の案を作成 ・取組内容を考える	各部会
各部の取組内容の確認 ・各部会の取組の調整	研究推進委員会
今後の取組内容の共有 ・各部から取組内容の提案	合同4部会

【資料 24】取組内容決定までの流れ

- ・指導技術部会 … 取組内容以外の指導技術(発問、指示、説明)等の整理
- ・授業規律部会 … 家庭学習の検討
- ・学習環境部会 … タブレットによる家庭学習、三輪中学びのリーフレット作成

○学習環境部会によるタブレットによる家庭学習の提案

タブレット端末を毎日家庭に持ち帰り、自学(授業の予習や復習)に役立てるようにした。具体的には、授業の復習の使い方として、AIドリルを使った反復練習や授業で書いたデジタルノートの整理、友達の振り返りの閲覧などである。授業の予習の使い方としては、ネットによる検索情報をデジタルノートに書き込んだり、ネットによる画像や動画をデジタルノートに取り込んだり、動画を活用して、授業を先取るなど夏休みより持ち帰り自宅での活用を推進した【資料 25】。学習への意識が高い生徒は、AI

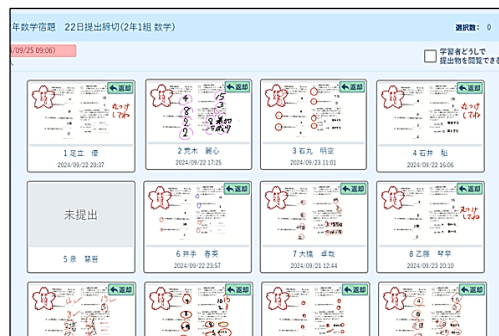


【資料 25】予習、復習での活用

ドリルを家庭学習に取り入れる生徒の姿が見られた。また点検や実態把握が容易なこと

から、【資料 26】のように、学習支援ソフトを提示し、回収後にはスタンプなどチェックを入れ生徒に返信した学年もあった。

しかし、家庭学習の方法は課題も多い。生徒の声を聴きながら、今度、検討していく必要がある。



【資料 26】学習支援ソフトの活用

(2) 「授業づくり」の実際【令和 6 年度】

ア 授業構想部会の提案と実践

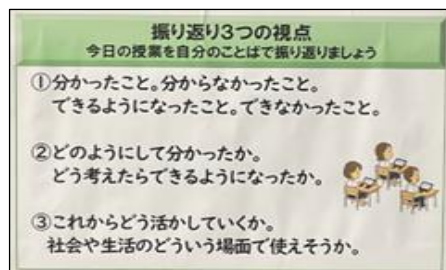
令和 5 年度の取組の成果と課題、本年度の日常的な授業実践等の課題から、授業構想部会は、以下を全体の共通実践項目として提案した。

授業構想部会による共通実践項目

- ◆学習規律部会と連携して、振り返りの意義、効果の共有（職員向け）
- ◆振り返りの 3 つの視点の教室掲示
- ◆単元構想の立て方
- ◆授業整理会の掲示物作成

振り返りの徹底と質の向上を目指し、教師と子どもで振り返りの意義、効果の共有と振り返りの掲示物の教室掲示を行った。これは、振り返りを指導と評価の一体化に生かすことや学習内容の更なる定着、自己の学びの自覚化を促進するためである。振り返りの意義、効果の共有については、授業規律部会と連携して資料を作成し、ミニ研修会において教師全体で共通理解した。

生徒用の資料は、授業規律部会が作成し、学年別に振り返りの意義について教師から説明を行った。教室掲示については、各教室と各特別教室に A 2 サイズで、3 つの視点をまとめたものを掲示した【資料 27】。少しずつではあるが、場の設定をせずとも、子ども



【資料 27】3つの視点の教室掲示



【資料 28】校内研修の様子

が主体的に振り返る姿が見られたり、他の子どもの振り返りを閲覧したりと意義ある時間にしようとする姿が見られるようになってきた。今後は、教科の見方・考え方を働かせる振り返りなど、更なる質の向上を目指した手だてを講じる必要がある。

単元構想の立て方については、北筑後教育事務所から指導主事を招聘し、単元構想の研修会を実施した。3 次構成の各段階に応じたねらいや方法など具体的

な講話により、教師が、日々の授業のつながりを意識するきっかけになった【資料 28】。

また、今年度大切にしているテーマ「子どもと創る」のもと、研究授業を行った際は、授業の振り返りを作成し、掲示するようにした【資料 29】。授業者から子どもへコメント欄を設けたり、教師の ICT 活用がわかるように写真の掲載を多くしたり工夫して行った。そうすることで、教師と子どもがともに授業を創るという意識の向上につながったり、実践を蓄積することで、いつでも誰でも過去の実践を共有することにつながったりしている。



【資料 29】授業の振り返りの掲示物

イ 指導技術部会の提案と実践

令和 5 年度の取組の成果と課題、本年度の日常的な授業実践等の課題から、指導技術部会は、以下を全体の共通実践項目として提案した。

指導技術部会による共通実践項目

- ◆子どもとつくる 3 要素を意識した「めあて」とそれに対応する「まとめ」
- ◆「めあて」までの導入部分の指導技術向上を目指した相互授業参観
- ◆説明、指示、発問等についての考えの共有

めあてとまとめの質の向上を目指し、内容、方法、言語活動の 3 つの要素を意識しためあて、そして、子どもの言葉でのまとめづくりを共通実践として取り組んだ。

めあてづくりに関しては、「めあてを押しつけでなく、生徒自身が学びたいと思うような導入を意識できた。」「めあてを子どもと一緒に創ることを意識したが、教師の意図とずれることもあった。」などと、積極的に取り組んだ声が多かった。また、まとめづくりに関しては、「子ども自身がまとめやすくなるように、ポイントを分かりやすくしたい」、「子どもに任せすぎると、教師が考えていることが反映されないこともあった」などの声もあった。めあてやまとめをつくるまでの教師の説明や指示、発問等の技術を高める必要とともに、子どもが考えたくなる仕掛けを各教科の特性に応じて考えていく必要がある。

また、2 学期より、「めあて」までの導入部分の指導技術向上を目指した相互授業参観を行った【資料 30】。導入の部分の授業づくりについては、北筑後教育事務所の学びの地図を参考に、ミニ研修会を実施した。参観は、導入部分のめあて提示までの 10 分程度、全員が参観の対象となるように部会内参観を原則とし、それぞれのよさや改善点をデジタル掲示板に入力して、いつでも誰でも閲覧できるようにした。「普段行こうと思っても、忙



【資料 30】相互授業参観の様子

しさのあまり、行くことができていないのでよい機会となった。」「他教科の導入をみて、自分の教科に取り入れたいものがあつた。」など、肯定的な意見も見られる反面、「教室に入りづらさもあつたので、見に行くという雰囲気づくりもした方がよい。」「デジタル掲示板に入力する手間がかかり負担感もあつた」といった意見もあつた。今後、負担感の軽減とともに効率的な仕組みづくりを探っていく必要がある。

今後、教師の説明、指示、発問等の指導技術については、12月より、資料を作成し、全体で共有する予定である。

ウ 学習規律部会の提案と実践

令和5年度の取組の成果と課題、本年度の日常的な授業実践等の課題から、学習規律部会は、以下を全体の共通実践項目として提案した。

学習規律部会による共通実践項目

- ◆授業後の授業整理会への生徒参加
- ◆ペアによる教室の座席配置
- ◆授業構想部会と連携して、振り返りの意義、効果の共有（生徒向け）
- ◆生徒会学習委員会による学習規律等の見直し

「子どもと一緒に授業を創る」の具現化のために、研究授業後の授業整理会に代表生徒（2名）が参加する取組を行った【資料31】。代表生徒には、①授業の振り返り、②授業評価アンケートの中での高評価の項目とそうでない項目について③その他の意見の3点を発表してもらった。初めて生徒が参加した際には、③のその他の意見で、「先生の指名ではなく発表する機会を増やしてほしい」、「振り返りに先生からのコメントをしてほしい」などと日頃の子どもたちの素直な意見を聞くことができた。一方、教師側から整理会後の意見として、「本当に聞きたいことが聞けなかった。」「生徒に気を使い、生徒ばかりに質問が集中した」などと、意見が出たため、会の運営を検討し、前半(15分)が生徒参加、後半(20)を教師のみの整理会とするように内容を修正して実施している。



【資料31】整理会への生徒参加の様子

また、教室での座席配置を見直し、ペアでの座席配置とした。ペア座席の目的は、①授業中分からないとき、となりの人に聞きやすくなる。②となりの人に教えることで、学習内容の理解が深まる。③自分の考えに自信がもてる。など自分のタイミングで協働的な学びができることを一番の目的として行った。

振り返りの意義、効果の共有については、授業構想部会と連携して資料を作成し、学年別に振り返りの効果、意義について教師から説明を行った。

生徒会学習委員会による学習規律等の見直しについては、あいさつの仕方、黙想などについて、目的を確認し、本当に必要なのかとこれまでの当たり前



【資料32】学習委員会の様子

を生徒に問い直しながら、見直しを図っているところである【資料 32】。また、今後、近隣中学校生徒会と家庭での学習方法等について、協議を行い効果的な家庭学習のあり方についても考えていく。

エ 学習環境部会の実践と提案

令和 5 年度の取組の成果と課題、本年度の日常的な授業実践等の課題から、学習環境部会は、以下を全体の共通実践項目として提案した。

学習環境部会による共通実践項目

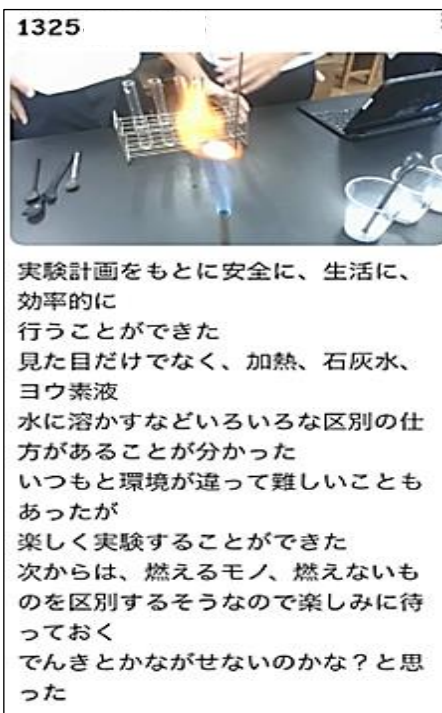
- ◆振り返り活動に、全学年、全教科共通のデジタル掲示板を活用
- ◆職員へのスキルアップ研修会の実施
- ◆教室の大型モニターと小型モニターの効果的活用の提案

振り返り活動の徹底と振り返りの共有化、可視化などを目的として、振り返り活動に、全学年、全教科共通のデジタル掲示板を活用した【資料 33】。生徒は、毎時間どの時間も、同じ様式に入力するので、スムーズに振り返り活動に取り組むことができるようになった。また、授業前に、前時の振り返りを確認して授業に臨む生徒や、授業の途中で、これまでの振り返りを確認する生徒も増えた。また、相互に閲覧が可能なので、他者の振り返りを参考にしたり、自分のものと比較したりして、学びを深めることもできている。今後は、授業構想部会とともに、質の向上を目指した手だてを考えていく。

職員へのスキルアップ研修は、ICT活用能力の向上に資することを目的としており、例年、行っている。本年も教職員の入れ替え、新しい振り返りフォーマットの導入等もあり、これまでミニ研修会として 3 回行った。4 月は赴任された教師を対象に、学習支援ソフト等の活用内容で行った。6 月には、共通のフォーマットによる振り返り活動を実施するために、デジタル掲示板の使い方について、8 月には、希望者のみ、使い方別でミニ研修会を実施した【資料 34】。

また、本年度途中より、教室に大型モニターが導入されたことから、大型モニターと小型モニターの活用法についての提案を行い、全職員で共通理解した。これは、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や自己評価、振り返りの活用の充実をねらったものである。さらに、大型モニター導入と同時に、モニターの配置場所や掲示物等も再度提案を行い、学習環境の統一化を図ることができた。

今後は、教職員の学びの環境整備のために、三輪中の学びのリーフレット作成（教職員用）等にも取り組む予定である。



【資料 33】子どもの振り返りの記述



【資料 34】ミニ研修会の様子

(3) 近隣校との研究推進

ア 近隣中学校との連携による学力向上の取組

近隣中学校の生徒会役員同士で、効果的な家庭学習など学力向上に関する情報交換及び協議の場を夏休み中に計画していたが、台風等の影響で日程調整できなかった。今後、冬休み等を活用し、Zoom等のオンラインで実施予定である。

イ 筑前町教育委員会との連携

本年度より、筑前町教育委員会主催のタイピングコンテストが実施されている。タイピング能力は、学びを促進させるものとして重要なものとなるので、朝の活動や休み時間等を活用し、タイピングスキルの支援を行った【資料 35】。生徒は、キーボード検定サイトを使って、スモールステップで自分のペースで楽しみながら、タイピングのスピードと正確性を高めることができた。



【資料 35】タイピングに取り組む姿

また、町が運営するアフタースクールと連携して、個別の学習状況等の共有や取組内容の提案を行った。諸学力調査や学力テスト等の問題などを提供し、学習の充実を図ることができた。

ウ 小中連携による学力向上の取組

小中各校のICT推進教員の連携のもと、ICT活用の先進的な取組を行っている三輪小学校での授業参観など、研究推進委員会以外の職員も参観予定である。

※筑前町学力向上プロジェクトチーム会議や筑前町教育委員会主催学校間交流研修は、昨年度同様、引き続き実施している。

(4) ICTを活用した広報手段の活用

三輪中学校公式ウェブサイトの定期的な更新を行い、学力向上推進拠点校指定事業の資料や公開授業の様子を発信している。今後、筑前町教育委員会、北筑後教育事務所との情報発信の連携を強化していきたいと考える。

(5) その他

自己肯定感等の非認知能力向上のために、学校運営協議会の取組や、各種ボランティア活動等への参加を推進している。

- ・「草場川へおいで」の取組（学校運営協議会主催）
- ・愛校作業草取りボランティア
- ・筑前町ボランティアバンクへの登録
- ・筑前町社会福祉協議会のボランティアチームへの参加

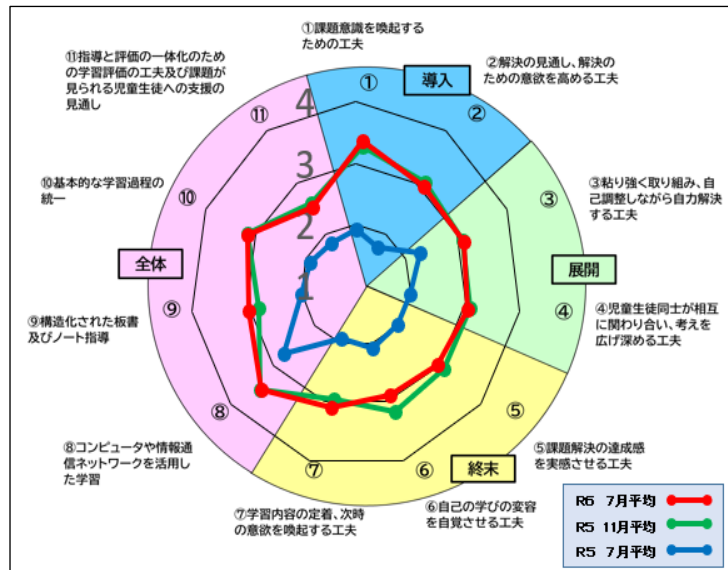
8 全体考察

① 授業改善の日常化や学力の基盤づくりを図る組織編成について

【資料 36】は、令和 5 年度 7 月連絡協議会と 11 月初年度報告会、令和 6 年度 7 月連絡協議会の授業チェックリストの結果である。

項目①「課題意識を喚起するための工夫」に関しては、0.11 ポイントと一番数値が伸びた。各部会の取組を通して、授業の導入段階で、前時の振り返りを活用し教師が前時と本時のつながりを意識したことが要因としてあげられる。

一方、項目⑥「自己の学びの変容を自覚させる工夫」に関しては、-0.32 ポイントであった。学習前の自分と学習後の自分を客観視するメタ認知能力などを高める取組が必要とされる。また、よりよい授業なくしては、よりよい振り返りはありえない。今後も、各部会の取組を通して、日々の授業改善を目指し、振り返りの質を上げる手だてを講じる必要があると考える。



【資料 36】 授業チェックリスト結果

② ICT 活用について

PC・タブレット等、ICT の活用は、職員アンケートによると、活用頻度は増加傾向であったが、生徒は、まだ実感するまでに至っていない。自力解決・協働解決場面で、タブレット等を個人で活用する場面を増やし、生徒の活用している実感を向上させる必要があると考える。

9 成果と課題【令和 6 年度】

(1) 組織づくりの成果と課題

【成果】

- 取組内容決定の流れを変更したことで、一人一人の考えや意見が全体の取組に反映することができた。
- 「子どもと創る」をテーマに生徒会と連携したことは、縦割り学習など生徒の主体性を育む取組につながった。

【課題】

- 各取組の浸透・徹底を図る組織のあり方の工夫
- 家庭学習の取組の充実を図るプロジェクトチームの組織編成

(2) 授業づくりの成果と課題

【成果】

- 振り返り活動に全教科共通のデジタル掲示板を導入したことは、振り返り活動の徹底とともに、生徒同士の振り返りの共有化、可視化につながった。

○授業整理会への生徒参加は、「子どもと創る」の具現化とともに、生徒の生の声を授業改善につなげることができた。

【課題】

●教師の説明、指示、発問等の指導技術向上のための手だて

●振り返りの質の向上のために、教科の特性を踏まえた振り返りの視点の構築

(3) その他

【成果】

○町教委主催のタイピングコンテストやアフタースクール等、町教委と連携して学力向上推進に取り組むことができた。

【課題】

●ICTを活用した広報手段の確立